

玉川教会たより

日本基督教団玉川教会
町田市玉川学園 4-5-32
電話 042-732-9321

「主を信じる」

「アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた」(創世記15章6節)

7月に入ってから降り続いた雨によって西日本を中心に大きな災害が起こりました。それぞれの地において痛みや悲しみを負っておられる方々に主の慰めがありますようにお祈りいたします。

7年前の東日本大震災の時もそうでありましたが、大きな災害が起こると様々なことが始められたり、見直されていきます。23年前の阪神淡路大震災では「ボランティア」ということ自体が注目されるようになり、この年のことを今では「ボランティア元年」と呼ぶようになりました。また、東日本大震災では、被災地における精神的な支えが見直されるようになり、震災直後よりもむしろある程度の時間が経ってからの支えが必要であることがわかってきました。

キリスト教会においても様々な形での支えを行い、実際に大きな災害が起こった時には色々な形での被災地支援が行われてまいりましたが、それと同時に「救い」について改めて考えるようになりました。信仰者の中でも「どうしてこのようなことが起こったのか」、「どうして自分だけが助かったのか」ということを考える人もいるように、被害の大きさを前にして「救い」に疑問を持つようになってしまったのです。

苦難の中にある時、私たちの前には沢山のものが目の前に現れてくるために、色々なものに「救い」を求めるようになりがちです。しかしそこで大切なのは「神による救い」を信じることであり、そこに「希望」を見出していくことです。マルティン・ルーサー・キング牧師が公民権運動の最中に「わたしたちは、限りある失望を受け入れなければならない。だが、限りない希望は、決して失ってはならない」と語りました。目の前に起こった出来事にわたしたちはまず「失望」するけれども、その「失望」を受け入れることから「希望」への道は始まっていくのであり、そこから始まった「希望」は決して失われることがないことということ、この言葉から覚えていきたいと思うのです。

創世記のアブラハムの物語の中で、まだ「アブラム」という名前であった彼の信仰が神さまに良しとされたのは、ただ神を信じ、神に希望を置いていたからでした。確かに「アブラム」時代の彼はどこかで「失望」を感じていました。自分の人生において神を信じ、熱心に祈っても子どもが与えられない現実に「失望」していたのです。自分には叶えられないことがあり、「どうして」という思いがあったのかも知れません。しかし、年老いた自分がもはや頼りにすることができるのは、「希望」を置くことができるのは、神さましかいないと信じたのです。主を信じることから始まる希望がわたしたちには与えられている、失望の中から始まっていく信仰の希望があることを覚えてまいりましょう。